

小学校教諭を志望する学生の幼小接続の意識に関する一考察 — 幼稚園実習の振り返りを中心に —

今井 康晴

A Study on the Consciousness of During the Transition From Preschool to Elementary school
among Aiming for Elementary School Teacher
— Focusing on reviewing kindergarten practice —

Yasuharu Imai

要旨

本論文は、昨今課題となっている幼小接続について、小学校教諭を志望する学生の意識に焦点を当て検討した。その主な観点として、小学校教諭を志望する学生が、幼稚園実習の前後における意識の変化について検討した。また幼小接続という観点において何を学んできたかについて考察した。研究方法として、幼稚園実習事後指導において振り返りを実施し、その際のワークシートの記述をKJ法で分析した。分析の結果として、小学校教諭を志望する学生は幼稚園実習を行ったことによって幼児教育に対する見方が変わり、幼小接続においても幼児教育の学びと小学校教育の学びの親和性を示していた。以上のことから、幼小接続という観点が幼稚園教員や小学校教員になってから取り組むべき課題ではなく、養成段階から取り組むべき課題として提案される。小学校教諭になるから幼児教育の理解は不要ということではなく、幼稚園実習を通して小学校教育を深めることでより質の高い小学校教員養成となることが期待される。

キーワード

小学校、幼稚園、教育実習、幼小接続、教員養成

1. はじめに

2017(平成29)年に改訂された幼稚園教育要領(以後、新教育要領)において、前改訂に引き続き幼小接続が強調された。同じように2017(平成29)年に改訂された小学校学習指導要領(以後、新指導要領)でも学びの連続性に焦点を当てた幼小接続が強調された。

本論文では、新教育要領、新指導要領ともに課題

となっている幼小接続について、小学校教諭を志望する学生の幼稚園実習に焦点を当て検討した。主な観点として、小学校教諭を志望する学生の視点から、幼稚園実習の前後における意識の変化に着目しつつ、幼小接続という観点における実習生の学びについても考察した。そして、今後の教員養成や実習分野における幼小接続の可能性について展望する。

2. 新教育要領、新指導要領にみる幼小接続

まず新教育要領では、「第1章総則」、「第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」として、①豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、②気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、③心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」の3点が示された。¹この「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」を3つの柱に据え、これに応じた幼児教育の検討が課題として示された。さらに3つの資質・能力を小学校教育やそれ以降の教育へのつながりを見通して「幼児の終わりまでに育ってほしい姿」として「10の姿²」を提案した。

「10の姿」は、幼稚園修了時の具体的な子どもの姿を示すだけでなく、「5 小学校教育との接続に当たっての留意事項」のなかで「(2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする³」と示された。このように「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は幼稚園だけでなく、小学校でも共有し指導を行う際に考慮するものとして掲げられた。こうした文言や具体的な姿の共有はこれまでにない方向性であり、幼小接続へのより強固な姿勢を読み取れる。

一方、新指導要領においても、幼小接続に関する項目が新たに付け加えられた。例えば、総則の「第2 教育課程の編成」において「4 学校段階等の接続」として「(1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体

的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。…特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、総合的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと⁴」などが示された。この中で、新教育要領にもあった「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という文言が使用され、まさしく新指導要領でも共有がなされている。特に生活科を中心に、各教科において「幼稚園教育要領に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と関連を考慮すること」と示されるように、上記した「10の姿」も含め、小学校教育を運営していくことが必要不可欠となっている。小学校においても、幼稚園での学びを小学校教育に反映させていく方向性として、生活科を中心に「10の姿」などを共有し、運営していくことが強調された。

3. 幼小接続の形態と先行研究

こうした接続への受容が高まる中で、具体的な接続の在り方として、合同研修会や合同研究会などによる幼稚園と小学校の教員間の接続や交流、生活科や総合的な学習の時間、各種行事などによる幼稚園児と小学校児童の接続や交流、幼小接続を見通したカリキュラムの接続など3つの方向性が挙げられる。またカリキュラムの領域では、幼稚園ではアプローチカリキュラム、小学校ではスタートカリキュラムといったそれぞれでの教育課程の研究^{5,6,7,8}や5領域と教科内容の接続^{9,10,11}など様々に試みられている。

ところで、本研究と関連する「実習」や「教員養成」をキーワードとした先行研究は、松永らによる研究が挙げられる。松永らは幼稚園教諭免許及び小学校教諭免許を取得するための教員養成を再考し、総合的な学びとしての実習の在り方、また幼小接続を見据えた育成の在り方を論じた。このなかで、学生間、教員間を含め互いの理解を深めること、実習生同士の意見交換などが指摘された。¹²また広兼ら

の研究では、幼稚園実習生が、幼小連携という観点から実習を行うことによる効果を検討し、特に指導者の支援の在り方について考察した。広兼らの研究では教育実習における学生の成長に焦点を当て、学生と指導者における幼小の子どもの姿、学びの差異点を指摘した。¹³

このように幼小接続の研究において、カリキュラムや教育内容の先行研究は枚挙にいとまのない状況である。一方で、教員養成や教育実習における幼小接続の研究は極めて少なく、本研究が対象とする小学校教諭を目指す学生の幼稚園実習の学びに着目した研究は、管見の限り見当たらない状況である。

以上をふまえ、小学校教諭を志望する学生の幼稚園実習体験に関するアンケート調査を基に、小学校教諭を志望する学生の視点から、幼児教育に対する意識の変容に焦点を当てた。またアンケートのなかで幼小接続を質問項目として挙げ、小学校教諭を志望する学生から見た幼小接続について明らかにした。主なアンケート項目として①実習の前と後で、幼児教育に対する考え方、見方は変わりましたか？②「幼稚園と小学校の接続」という観点で、どんなことを学びましたか？について取り上げた。

4. 方法

T 大学では4年間の学びの過程で、大学2年次に幼保履修モデルと小幼履修モデルに分類される。小幼履修モデルの学生は、大学4年次に小学校実習を修了した後、10日間の幼稚園実習を修了することで幼稚園教諭免許状取得となる。本論文では、T大学の小幼履修モデルに在籍する4年生を対象に、幼稚園実習に関するアンケート調査を行った。対象学生は、4年次において小学校への教育実習4週間（平成29年5月～6月）を修了し、且つ幼稚園への教育実習2週間（平成29年9月～10月）を修了した学生13名（男子7名、女子6名）である。調査時期及び調査方法は幼稚園実習事後指導（平成29年10月16日）の中で自由記述式アンケートを実施し回収した。調査内容として、質問項目①実習の前と後で、幼児教育に対する考え方、見方は変わ

りましたか？②「幼稚園と小学校の接続」という観点で、どんなことを学びましたか？以上の質問に対する回答を抽出し、記述内容をKJ法によって分類、カテゴリー化し分析した。

5. 結果と考察

アンケート結果として①と②の設問項目から合わせて26のエピソードが抽出された。これらをKJ法により分類した結果、①の設問では2つの大カテゴリー、3つの中カテゴリー、6つの小カテゴリーに分類された¹⁴。まず設問①では13人中11人が実習前後における幼児教育に対する見方や考え方の変化を示していた。その詳細として大カテゴリーでは、【保育方法、保育内容に対する変化】、【実習生自身の教育観、子ども観の変化】が示された。（表1参照）

【保育方法、保育内容に対する変化】では幼稚園教育と小学校教育の差異として、方法や内容などに関する意識の変化が指摘された。中カテゴリーでは〔遊びを通した学び〕が挙げられる。一般的に幼稚園は遊び、小学校は教育という認識であり、学生にもそうした認識をもって実習に臨んでいた。しかし、幼稚園実習を体験したことで、その認識の変化が生じ、アンケートにも反映された。実際の自由記述を示すと下記のようなになる。また原文の例示に当たっては斜字と下線で示した。

〔遊びを通した学び〕

遊びを主体する活動の中で、どのように教育をおこなっていかかわらなかつたのですが、友達との様々な関わりや、集合や移動といった単純な動き一つ一つに学びがあることを知りました

実習前は幼児に『学ばせる』ということが強要されがちなのかとと思っていましたが、実習を通して遊びで学びを身に付けるので、幼児は楽しみながら学びを得ることができているのだと思いました

幼稚園実習を通して幼児たちは日々の遊びや友達との関り、その他様々な環境から多くのことを学

び、成長していくのだと改めて実感することができました。

これらの回答は、遊びの中で子どもたちの学びを体験していることを学び取ったと同時に、遊びの醍醐味である楽しさ、日常性に対する理解を深めたことが示唆される。そして「遊びを通した学び」の展開として小カテゴリー〈小学校教育との親和性〉が以下のように示された。

〈小学校教育との親和性〉

遊び、生活の中で様々な力を身に付けていくということで、遊びが中心の生活なのだというイメージがあったが、実際は分刻みで活動し、集団行動できるように促すことを大切にしている、小学校での環境と似ていると感じた。特に年長児のクラスは、生活の節々に小学校を意識しており、自分で時間を確認しながら行動したり、友達に自ら進んで声をかけて話し合い等をしたりと、普段からの保育者の働きかけがしっかりと子どもに反映されている姿が見られた。

上記のように幼稚園と小学校の親和性を示す回答も見られた。こうした背景にも、幼児教育が単に遊んでいるのではなく、「遊びの中で学ぶ」ということを実感しつつ、保育と小学校教育の差異やギャップというよりも、遊びによる学びに対して、小学校教育との類似性も示しており、幼児教育に対する理解の変化として捉えることが出来る。

次に「具体的な取り組み」として次のように示された。

〈声掛けの仕方〉

実際に先生と子どものかかわりを見てみると、何倍も子どもと笑顔で接し褒めているときの方が多かった。注意しなければならない場面では、普段よりも強い言葉でたしなめるような声掛けを行っていた

〈ピアノの活用〉

想像していたよりもピアノを聞いて生活をしていると感じました。片付けや落ち着く時の曲が決まっております聞いて行動をする事がとても多かったです。その一方で、朝の会や帰りの会の流れは身に付いており、次に何をするか考えられていた

〈保育者の関わり〉

保育者はその成長をサポートするために様々な手立てで援助しているのだということも気づくことができました

以上をふまえると、幼児教育方法の特徴として、環境を通して保育することが挙げられるが、環境を構成する教師の動き、言葉かけなどに対する関心が散見された。教師間の連携であったり、日常の働きかけであったり、生活の端々に見られる援助についても共感を得ていた。また幼児教育の特徴で、かつ小学校教育では見られない方法としてピアノの使用について挙げられた。小学校ではチャイムで区切られた生活であるため、ピアノを用いた生活の流れに対して示された。

保育内容や保育方法と異なり、【実習生自身の教育観、子ども観の変化】に関する記述も見られた。換言すれば、実習生が実習を通して幼児教育に対する考え方の変化や子どもに対する認識の変化についてである。なかでも中カテゴリー「幼児期の捉え方」では、幼児教育の特徴である発達についての言及を小カテゴリーとして細分化した。

〈発達についての認識〉

3歳児を担当させていただきましたが、想像していたよりもコミュニケーションがとれることが分かりました。また3歳児クラスの中でも月齢によって、発達が違い、トイレに1人で行ける子や、オムツをしている子がいました

3歳児だったら言葉も話せるようになるし、話せば善悪の判断はつくので、伝えようとする気持ちが

重要だと感じた

朝の会や帰りの会の流れは身に付いており、次に何をするか考えられていたり、保育室内が騒がしいと『うるさいよ』と注意できる子がいたり、4歳児でも立場やすることを理解できる事に驚きました。

小学校教育では周知のように学年によって分類される。無論、幼稚園でも年齢別の学級を構成しているが、それ以上に個々の発達、月齢を重視する。そうした幼児教育の独自性に触れることで、個々の発達で子どもを捉えることを体験したといえる。また〈年長児の様子〉として次のエピソードが挙げられた。

〈年長児の様子〉

特に年長児のクラスは、生活の節々に小学校を意識しており、自分で時間を確認しながら行動したり、友達に自ら進んで声をかけて話し合い等をしたりと、普段からの保育者の働きかけがしっかりと子どもに反映されている姿が見られた

以上のように、実習生自身の教育観及び子ども観の変化と実習生自身の保育観や子ども観の変化を中心に、幼児教育に対する意識変化が全般で見られた。遊びを中心とした幼児教育に対して戸惑いつつも、「遊び=学び」という意識変化を通して親和性を見出すことが出来た。一方で具体的な保育方法に関する認識の変化もあり、ピアノの使用法、声掛け、関わりについては差異として指摘された。発達に関しても同様で、幼児に対する過小評価から、月齢による発達の差異、幼児の言動に対する驚きが散見された。これらのエピソードでは、幼稚園での集団生活で育まれる社会性の芽生えを実習生なりに理解し、変化として現れたものと推察される。

次に質問項目②では、『幼稚園と小学校の接続』という観点で、どんなことを学びましたか?』として、小学校教員を目指す学生からみた幼小接続という観点で、次のカテゴリーが指摘された。(表2参

照)

まず2つの大カテゴリー【発達の連続性】、【幼小接続の具体的な内容や方法】が示された。そして小カテゴリーとして5つが示された。まず【発達の連続性】では年長児からの発達を、小学校1年生へと引継ぎ、連続的に捉える視点である。本論文の場合、小学校へのボランティア活動や教育実習を経た学生たちから、年長児の発達の在り方について示された。下記のような小カテゴリーに分類される。

〈小学校1年生と年長児の比較〉

5歳児と小学校1年生を比べると1年生の方が幼いと思いました。新しい環境になることによって気持ちの変化が起こってしまうと思いました

小学校1年生は頼りなく、教師がなんでもしてあげなければいけないと思っていましたが、幼稚園実習で年長の頼もしさを知りました。縦割り保育という環境によるのか泣いている幼児をあやしたり、指示を出したりとしっかりとしたお兄さん、お姉さんでした

〈連続性の捉え方〉

小学校1年生からスタートし、6年生で終わりという概念ではなくて、幼稚園での2年間、もしくは3年間があってスタートするということを教師は知り、教育していくことが大切だと学んだ

これらの小学校1年生と年長児の発達に対する見解として、質問項目①でも示された年長児の発達に対する過小評価と小学校1年生の姿に対するギャップが指摘される。年長児の「お兄さん、お姉さん」としての姿が生かされていない状況を実習において体験したことによって、小学校1年生への関わりの変化が期待される。

次に幼稚園と小学校の教育として大カテゴリー【幼小接続の具体的な内容や方法】として、内容や方法に関する意見が多数見られた。小カテゴリーでは〈小学校教育への意識〉、〈具体的な指導内容〉、〈幼

児教育への理解と課題) について示された。

〈小学校への意識〉

接続という観点で円滑に取り組みを進める為に、小学校教育の予習のような活動や取り組みを保育の中で行っていた

幼稚園では「なるべく自分でできることは自分でやる」ということを狙いとしてました。年長になると自分で考えて行動する機会が増え、先生の指示も年少と年長では違うと感じました。また数の数え方、決まりやルールを認識するといった初歩的なことを小まめに取り入れていました

生活に見通しをもてるよう、先の先まで伝える言葉掛けをしている所や自分で考えて動く力を身に付けていく援助をしている所が、小学校での時間で区切られた生活リズムや集団行動での学びの環境に適応できるよう、幼稚園で意識しているなと感じた

〈具体的な指導内容〉

幼稚園の先生は各小学校の特色を理解しており、小学校に行くまでにこれだけは学ばせたいラインを知っていて、マイナスな部分があれば保護者との協力により強めたりと準備をしっかりしていました

年長からでも小学校に入った時の事を考えて指導をしている。一人でトイレ、話を聞く態度、友達との接し方、給食制度

幼稚園から小学校へ上手く接続させるために、人との関わり方については、保育を通して徹底して行われていると感じました。年少から年中にかけて友だちとの関わり方を知り、徐々にルールやきまりを守って行動することができるように指導をしていました。さらに日々の遊びや活動では、幼児たちのできることを一つずつ増やしていけるように段階を踏みながら援助指導をしていました。これは小学校の教師にも大切なことで、こうして幼稚園と小学校の

接続、連携がなされていくのだと学ぶことができました

幼小連携プログラムということで、小学校へ行き、小学校1年生と年長さんが各クラスで遊ぶという行事に参加しました。「幼稚園の教室と小学校の教室の違いは何か」や「どんなところを不思議に思ったか」を見てくるように保育者が声をかけていました。そのような声かけをすることで、幼児が意識して小学校について学べるのだと感じました。

接続という観点においては、小学校教育を見通した指導について散見された。主に小学校教育を導入したもので、小学校への準備という視点で展開され、年少と年長の指導の差異をふまえつつも、幼稚園での生活や教育が全般において小学校へと繋がっていくことを体感していた。小学校教育からのアプローチとして特筆すべき点であり、年長児になったら就学に向けてという観点でなく、年少からの連続性ということを理解を示していた。こうした意識を幼稚園教員志望の学生にも実感させたい要点といえるだろう。また小学校教育への意識として、小学校生活に合わせた取り組み、アプローチカリキュラムとしての年長児の教育が行われ、実習生として「接続」を理解していたのではないだろうか。

〈幼児教育への理解と課題〉

小学校に入学すると突然時間に縛られるようになると感じました。幼稚園では朝の会が始まる1時間前から登園する子がいる一方、小学校では朝の会まで長くても20分程度しかない等、各自の時間が取れない事に戸惑ってしまうのではないかと考えました。ピアノが鳴っている時間が長いため、小学校において、歌唱指導やリズム活動を取り入れた時間を多く入れる事がいいのではないかと考えました。

例えばハサミの持ち方、使い方において小学校1年生は、1から10まで教える必要はないということを知った。幼稚園の先生方が子どもたちに教えて

いるので、小学校ではその事をしっかり知り、他の教育を充実させていくべきではないかと思った。

何度か交流はしていたようだったが、2時間ほどしかないのに学校の全体像を見るのは難しいと思う。したがって交流の回数を増やしたり、子ども(小)から子ども(幼)に小学校の事を説明するなどのイベントも1つの案として行うべきと感じた。

幼稚園実習を通して、幼小接続の在り方とその課題について、子どもの在り方や保育者の振る舞いや指導に対して共感する意見と提案が挙げられた。

このなかで、幼稚園の教育として多用されるピアノの使用など、実践的な意見がみられ、小学校教育でも取り入れるべきではないかといった展望が示された。またピアノ同様に小学校教育との対比として、幼児教育が小学校教育を理解すべきであるというような、幼稚園教育に対する批判的な意見はみられず、むしろ小学校教育が幼稚園教育を知り、年長児の発達、教育内容、能力の習熟を知るべきであるという意見が散見された。小学校教員を目指す学生として幼稚園教育と小学校教育を横断し、学習した結果として示された。さらに現状の接続の内容に対する疑問も提案されたことから、幼稚園実習を通しての幼小接続の関心の向上が示唆される。

6. おわりに

本研究は幼小接続について、小学校教諭を志望する学生の幼稚園実習に焦点を当て検討した。主な観点として、小学校教諭を志望する学生の視点から、幼稚園実習の前後における意識の変化に着目しつつ、幼小接続という観点における実習生の学びについても考察した。

幼稚園実習前後の変化と幼小接続について総合的に検討すると次のように指摘される。「遊びと教育」という観点で検討すると、実習前では幼稚園と小学校の難しさや差異を感じていたが、実習後では「遊びの中で学ぶ」という幼児教育の基本を実習し、差異を克服すると同時に、小学校教育との親和性を

見出していた。

具体的な指導方法においても子どもの個性を引き出すような配慮、声掛けに共感し、幼稚園、小学校の大きな違いとしての意見はみられなかった。また小学校における生活場面でのピアノの使用など積極的な意見も見られた。

子どもに関する見方、考え方の変化では、主に幼児の発達について過小評価する傾向にあったが、その認識に変化がみられた。また小学校1年生と年長児の比較では、年長児の方が「大人である」ことを示し、実習生なりに接続の困難を感じていた。

そして「幼小接続」という観点では、現状では不十分であると同時に、幼稚園が準備教育として取り組むのではなく、小学校が幼稚園の教育を知り近づけていくのではなく、それを生かしていくという方向性がみられた。そのことによって、より充実した接続が可能になることが提案された。

今後の幼稚園教員養成、小学校教員養成、そして実習分野における幼小接続の可能性について展望する。新教育要領では「第6 幼稚園運営上の留意事項」の「3 地域や幼稚園の実態等により、幼稚園間に加え、保育所、幼保連携型認定こども園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るものとする¹⁵⁾」と記されている。同時に、新指導要領においても「第5 学校運営上の留意事項」のなかで「他の小学校や、幼稚園、認定こども園、保育所、中学校、高等学校、特別支援学校などとの間の連携や交流を図る¹⁶⁾」と記されているが、こうした連携機関、施設のなかに「大学」が含まれないのであろうか。すなわち、教員養成大学として小学校教諭を志望する学生の幼稚園実習を単なる幼稚園教諭免許状取得のためとして捉えるのではなく、幼小接続の一つの在り方として提案することは出来ないであろうか。

幼稚園や小学校においては免許状取得を目的とした実習及び、その他の体験学習はあるものの、幼小接続という観点では、連携、交流がなされていない。幼稚園教諭免許と小学校教諭免許を取得する学生が、互いの資質、能力、また高い教養を身に付け

る際に、幼稚園教諭を目指す学生でも小学校で体験活動を行う、また小学校教諭を目指す学生でも幼稚園で体験活動を行う、そうすることで学校種の先入観や線引きを超えることが可能ではないか。

本研究で示されたように、特に小学校教員として小1プロブレムへの対応や学びの連続性を実習し学ぶことは重要である。養成段階から幼小接続をカリキュラムとして取り入れ実践していくことは、今後の初等教育全般の質の向上に寄与するであろう。自由記述にもあったように、2週間の実習の中で様々な課題が提案された。そのことをふまえて、小学校教員になることは重要なこととして捉えるべきではないか。

今後も、継続して小学校教員を志望する学生の幼稚園実習を単なる幼稚園教諭免許状取得のためとして捉えるのではなく、幼小接続の一つの在り方としてその可能性を探求していきたい。

(Endnotes)

- 1 平成29年告示『幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(原本)』2017年 チャイルド本社 7頁
- 2 「10の姿」とは、①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現である。
- 3 前掲 平成29年告示『幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(原本)』10頁
- 4 文部科学省『小学校学習指導要領』2017年 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf#search=%27%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98%27 (2018/1/10) 10頁
- 5 佐藤康富「幼小の接続期におけるカリキュラムに関する一考察」『鎌倉女子大学紀要 17号』2010年 113-120頁
- 6 大江康夫・永利陽一「幼小接続の課題」『九州女子大学紀要 第54巻1号』105-122頁
- 7 齋藤多江子「幼小接続における教育課程の編成に関する研究」『こども教育宝仙大学紀要 8号』2017年 37-45頁
- 8 松寄洋子・無藤隆「小学校生活科と幼児教育とのつながりー接続期カリキュラムの検討をとおしてー」『白梅学園大学・短期大学 教育・福祉センター研究年報(18)』39-46頁
- 9 土井晶子「保育内容「環境」と小学校教育課程につながる保育者養成授業プログラムの検討(1)ー子どもの数量・図形、文字等への関心・感覚ー」『共栄大学教育学部研究紀要 2号』2018年 95-108頁
- 10 谷安憲「保育者になる学生が小学校各学年の図工教科書の図画を描く：保幼小連携を考えるきっかけとなるプログラム」『川口短大紀要 第31号』2017年 93-105頁
- 11 山内信子・持田葉子「幼小接続期における音楽表現活動の検討」『聖和短期大学紀要 2号』2017年 63-71頁
- 12 松永康史・森川拓也・田端智美・上村晶・北島信子・辻岡和代「幼小接続を見据えた教員養成の在り方に関する研究ー幼稚園教諭及び小学校教諭免許取得を目指した教育実習指導の課題と展望ー」『桜花学園大学保育学部研究紀要 16巻』2017年 139-159頁
- 13 広兼睦・池田明子・森田水加穂・佐原美穂・大上輝明・石田浩子・井上弥・朝倉淳「幼稚園教育実習における幼小連携に関する研究ー自ら学ぶ意欲を育む教師のかかわりに着目してー」『学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第44号』2016年 193-201頁
- 14 本論文では大カテゴリーと小カテゴリーの関連として、カテゴリー間の上位、下位として示している。大カテゴリーは【 】、中カテゴリーは〔 〕、

小カテゴリーは〈 〉と表記した。

- 15 前掲 平成 29 年告示『幼稚園教育要領 保育
所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育
要領〈原本〉』 13 頁

le/2017/05/12/1384661_4_2.pdf#search=%27%E5%
B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%AD%A
6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%
A6%81%E9%A0%98%27 (2018/1/10) 15 頁

- 16 前掲 文部科学省『小学校学習指導要領』
[http://www.mext.go.jp/component/a_menu/
education/micro_detail/_icsFiles/afieldfi](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfi)

(いまい やすはる) 東京未来大学

表 1 設問：実習の前と後ろで、幼児教育に対する考え方、見方は変わりましたか？

大カテゴリー	定義	中カテゴリー	定義	小カテゴリー
保育方法、 保育内容に 対する変化	実習園で行われた 活動の内容、 また具体的な 指導方法に対する 認識の変化	遊びを通した学び	遊びと学びに 対する意識変化	小学校教育との 親和性
		具体的な取り組み	具体的な保育方法 に対する意識変化	声掛けの仕方 ピアノの活用 保育者の関わり
実習生自身の 教育観、 子ども観の変化	実習前後での実習 生の教育や子ども に関する考え方、 見方の変化	幼児期の捉え方	幼児期の子ども達 に対する認識	発達についての 認識
				年長児の様子

表 2 設問：「幼稚園と小学校の接続」という観点で、どんなことを学びましたか？

大カテゴリー	定義	小カテゴリー
発達連続性	年長児と小学校 1 年生の 発達の在り方	小学校 1 年生と年長児の比較 連続性の捉え方
		小学校教育への意識 具体的な指導内容 幼児教育への理解と課題
幼小接続の具体的な 内容や方法	幼小接続に関する具体的な 方法や内容	